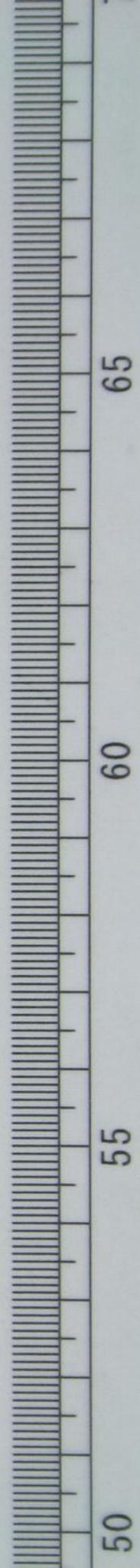


和田定節編輯  
源華史略

七編

下



A414

13上

繪本難波戦記三編卷之五

東京 和田定節編

大坂落城秀頼及び諸将自殺の事

新しん軍ぐん秀ひ忠でんハ井伊直孝及び安後重信石川八左  
 工門正次ホヤま進さハ一ひ精倉しやうくらヤ守まもらせ以もリ余あノ族しゆ  
 せまうシ相あ且り元もとノ命いのちト秀頼ひでよりガ籠かごリ一ひと倉中くらちゆうノ人ひと  
 名なヤ録ろくヲ翌あつ八日やちふにち新軍しんぐんハ本多正純ほんたのまさきよ及び及び加賀かが氏うぢ  
 甚た十じゆ所しよヤ一ひと之のヤと驗あやまさせ且かつ言いふ事こと己おのれノ此こゝノ至いた

良史史略

七下一

48-7648

復言ハ可きことなり太閤の旧好吾竟ハ忘る  
 能ハズ苟由母子皆降服さバ秀頼ヤ高松山ハ  
 置き淀君ハ捨さる小萬石ヤ以てせんと信長翁  
 申入る其よりヤ秀頼ハ告げ出て弟お軍ハ答  
 へて曰ふ謹んヤ命の辱ヤ拝せ當ハ往て之ヤ謝  
 せべ一然れども秀頼ハ猶萬兵の目ヤ淫々所  
 へくハ二與ヤ得て往んと直孝其詐ヤ疑ハ乃ち答  
 へて曰ふ軍中唯一與のニ右府請ハ馬ハ騎ト使

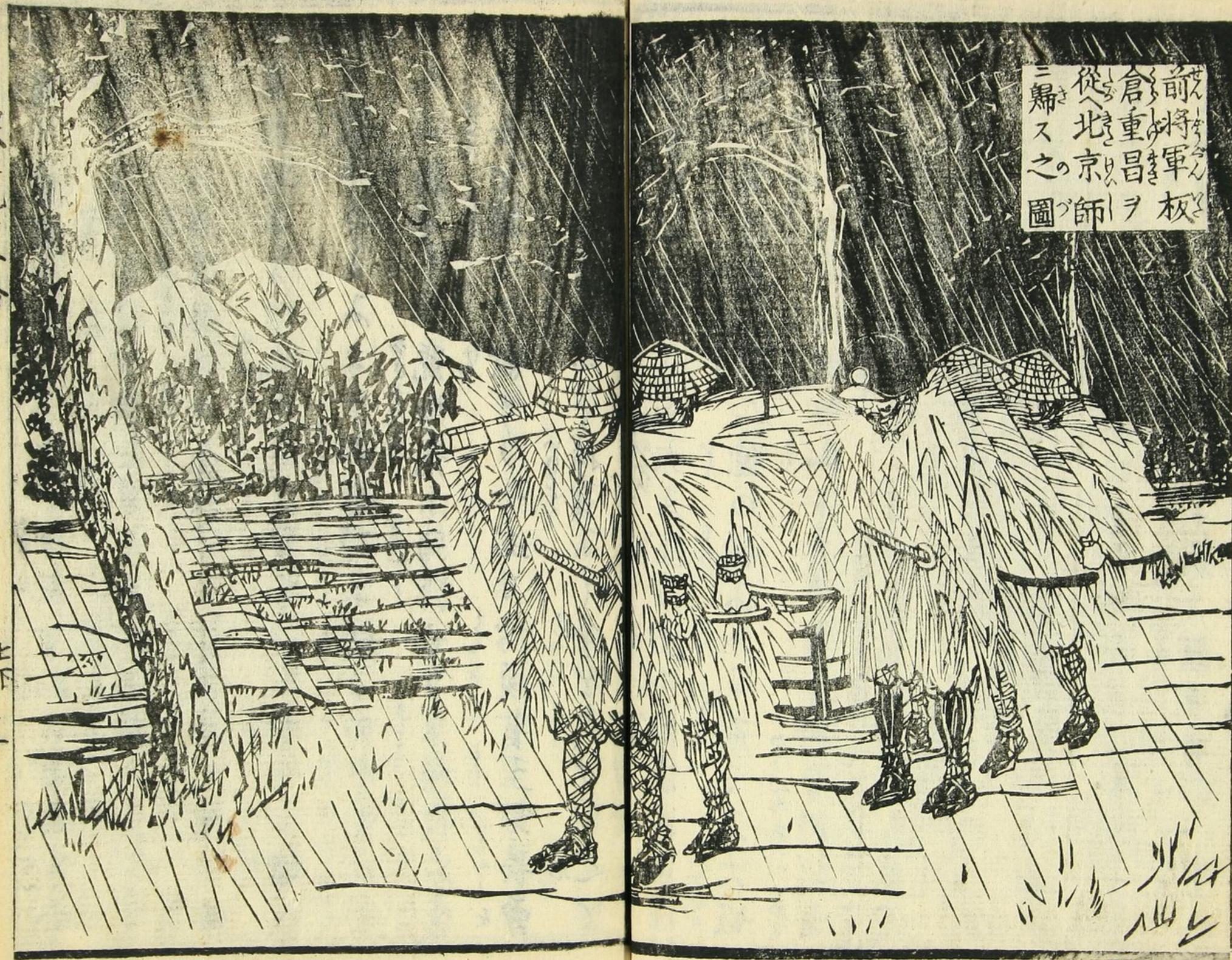
往復し決せざ直孝重信ハ謂て曰ハ大旨仁怒  
 たりといへども禍ヤ始まの是なり是我輩の取  
 ちるひハ在るのニ乃ち直孝銃ヤ秀頼ガ籠る  
 倉申ハ突くる者二の以て絶命すべきヤ示さ倉  
 中皆哭く秀頼凄然ト守久務永ハ謂て曰ハ吾太  
 閤の嫡子なり而して此ハ至るハ天なりト乃ち  
 自刃して薨ぶ年二十三務永之ヤ到て淀君秀頼  
 の首ヤ抱きて悲しむ辨ハ氏家道喜ヤして己ヤ

殺さしむ是も於て是喜治長守久父子狩永兄弟  
 津川左近伴回永應及び堀對馬守伊後武藏守成  
 國内藤頭森島長門守加藤弥平太高橋市三舟土  
 肥庄丸守舟尾庄右津つ片岡十右工の垣系三十舟  
 小室茂吉淺井周防守中高半三郎お二十餘人  
 皆殉き治長重成渡辺尚之介母有りて此処も孫  
 たるが北畠氏湯川氏木の婦女と共に十人並び  
 死を秀粒のいさむべ死せざるに真回大助秀粒の

之所不随入衆之不後して曰ふ回臣はく思進  
 者有り子ハ客死の子なれば必之不殉死せを盡  
 出城して走らざるに大助對へて曰ふ我父我不  
 命むる不必修右府と死を俱不せよとなりとて終  
 不倉外不居り就き藁を藉きて坐し食はざるに  
 一尋夜秀粒の死するに埃ち乃ち自教を弟軍  
 此時方不進んで樗門不至り以て秀粒の出るを  
 待つ不直孝ら来つて其状を告げ罪を請ふ弟

軍之と聞て領くのみ東軍諸お争ふて是る軍の  
 牙嘗ふ赴き我捷と賀む小出大隅守三平の正  
 將軍の側ふ侍を是る軍城中の火を指し得て曰  
 ふ形なりの如き有極ありきまへ如何いかにと三平警然おどろ見るのこ  
 う首くびを垂たて曰ふはこれと視るふ恐おそびむと借かる  
 或あるハ愧はる色いろあり即すなはち日午時ひるごころ是る軍遠とほふ驚おどろと令あト  
 獨ひとり板倉重昌いたくらしげまさと從したがへ北京師きやうき不な得らんとし曰ふ  
 道みちと驅およ大戦おほいせんの後のちあるゆへ當まさふ雨あめふべしと從したが

者信しんせむ已まふしと兩大おほいふ至いたり上下じやうげ沾ぬ濕る淀みふ了  
 兩衣りゆういと取とり夜よ二鼓にこ二條にじょうの城しろふ入いる而しからふ大坂  
 の諸軍しよぐんつとし之これと知しるりのなし將軍阿部青  
 山あべのあお水みづ種たね守しゅ木の四よねとて天王寺てんわうじ玉造たまぞう青屋あおや系けい橋はし  
 の四門しよもんと守まもらせ又また安やす最さい重じゆう信しんとて西面せいめん四よ重じゆうの  
 卒そとと留とどめり了し城墟しろと修理しゆりせしめ其その所ところの尸しと園う山さん  
 不な収とめ以もつ軍神ぐんじんと祭まつり翌あした九ここの日ひ伏ふ見みふ凱旋がいせんを備そなへ  
 候まちふ争まふ了し殘黨ざんたうと捕とらえ未まり敵けんむ秀ひで頼より一ひと男おとこ一



前將軍板  
 倉重昌ヲ  
 從北之師  
 歸ス之圖

女有り皆度出たりいまど所在を知らむ東軍金  
 と懸けく大ふ之と索む男と因松秀勝と名づく  
 南め了八才其保田中壹政守と伏見衆人橋の時  
 不匿れ居くると或人其美質と賭て怪しと捕へ  
 之と献とくふより六條磧不斬る田中壹政守  
 傍ら不持せしが號慟竟不殉死せり京極氏亦秀  
 頼の女と捕へ了献せり十五日悟須賀至鎮長曾  
 我部盛親と男山ふと捕獲ふし命と交けて之と

二條城の西門不縛を了と数日の後六條磧不斬  
 うて梟を後二旬大建道見の弟と界浦不て磔ふ  
 在大坂の市平水原石見二條城の側不匿れたり  
 一と後堂高虎の従士捕ふ石見追手の兵三人と  
 殺し了死を渡辺尚治長と後圓と為んこと代約  
 一と走つと近江不至りしが秀頼の薨ぶると写さ  
 乃ち自殺を治長弟治氏初兄と協む往くと亦將軍  
 不仕へしが是不至つと自殺し人ふハ暴疾と思

はを治氏の兄治房ハ明石守重仙石宗也と潜小  
逃れ所在知らば大坂の石伊東長實奔つゝ高野  
不在り監使を得て自裁せんとして請ふ前將軍曰  
ふ治長ら國を誤り益惣ふ乱を煽動を皆宥さざる  
所なり其他を治氏の回信未忠を率ふる所不  
在者なり我皆之を赦まると長實及び青木一重岩  
佐正壽ら囚を改め仕る者數十人真田幸村の妻  
紀伊不在り捕へて獻せしめ赦され髪を削り尻と

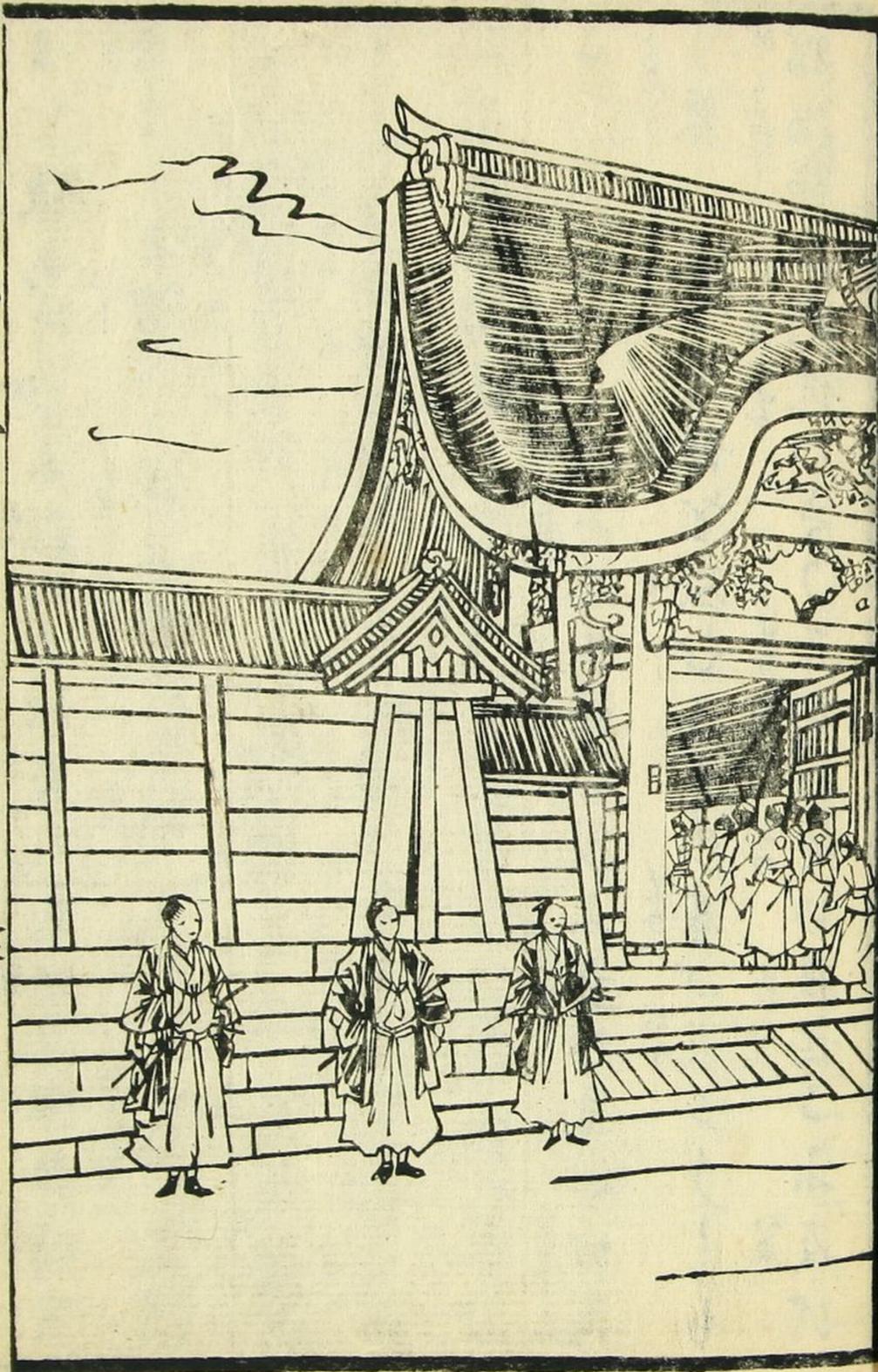
るを各餘大坂の逃臣七十二人卒六百八人質と出  
東軍不在りて歎と城中不通する者皆誅せし  
了古田鐵部正重然大坂小心と通ぜしる覺て誅  
小伏一増田長益ハ其男兵太夫の故と以て死  
死所小錫ふ細川忠奥の庶子式部興利ハ罪と父  
了獲奪つゝ大坂を攻めしむ及んて捕えし  
れし幕下ての宥しられども父忠興死と與へ  
たり終の役小忠奥ハ薩廣の防ぎ小兵を備へ

と以て来り會せむ夏の役興ふ及び希ね近  
居ふ謂了日ふ忠貞必衆ふ先づて至ると希將  
軍の駕星田ふ次るの時忠貞果して至り七日の  
我與ふ功有り是ふ於て西南の諸侯の後ふ至る  
若忠貞ふ相繼て兩公ふ謁見を兩公命じて城内の  
燈籠を収め金二萬八千枚銀二十四万兩をゆこ  
り令る大銀千枚ふ直る者各二と以て直孝高虎  
あゆひ其功を賞は六月ふ至り大坂城を松平忠

明ふ揚い十万石をあてふ忠貞荒瘵を修め田至  
と後部軍ふ一に段富故の如く十五日家康入朝  
し其成素を告げ白金千兩を献む片相且元の為  
ふ郎を駿府ふ置く且元駿府ふ至るや愧慙つひ  
ふ疾と成り至るむ一に卒を二十八日將軍秀忠二  
條ふあり賞罰を後一に直孝高虎ふ封を加ふるに  
給五万石其他官を進め封を皆差別あり水  
生勝成教育ふ違ひ輕自刃を接元款と戦ふ

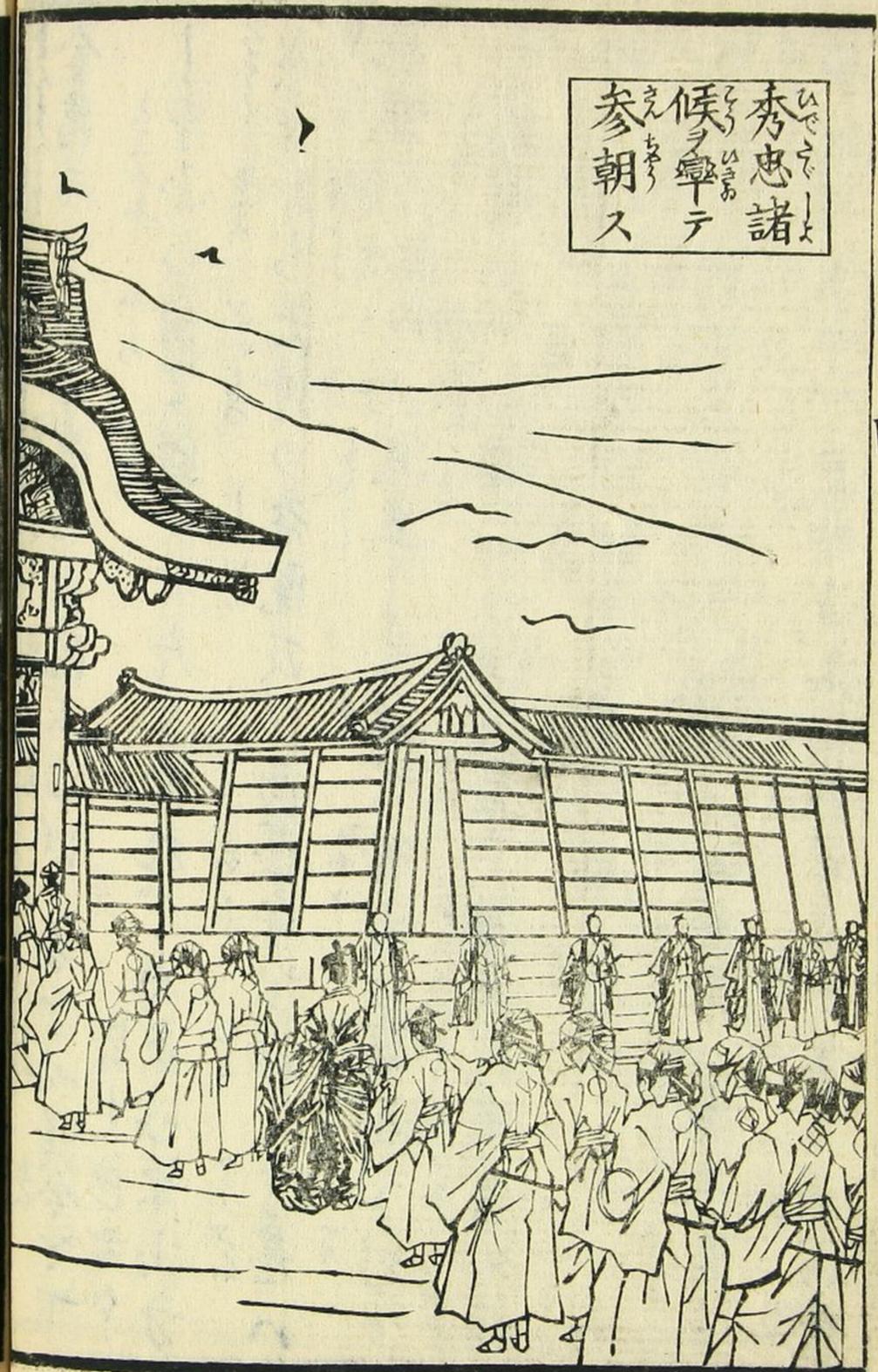
故小室こむろと義よみとむむおお後のち田の信のぶ吉よし軍ぐん監まにとと一いつ軍ぐんのの機きと  
失しふふとと以もつてて是こゝをを責せめめ其その邑むらをを没めつ収しゆせせららるる本ほん多た忠ちゆう  
取と付つ死しししてて子こをを一いつ依よりりてて兄あに忠ちゆう政せいのの子こ政せい也なりとと一いつ  
封ほうとと誓ちかししむむ小こ笠かさ原はら忠ちゆう真ま父ちち秀ひで政せいのの封ほうとと誓ちかししむむ又また豊とよ  
臣とみ氏しのの田の長ちやう加か者もの嘉か明めい馬ま田た長ちやう政せい皆みな情なさけふふてて軍ぐん小こ從じゆう  
ひひ本ほん下げ利り房ぼう功こうとと立たてて其その邑むらをを復かへしし加か公こう清せい之の綱つなの  
孫まご松まつ下げ右みぎ兵へい衛ゑ佐さ吉きち綱つな邑むらをを益まししてて二ふた万まん石ごう不ふ至いたららずず  
閏うるし五いつ月げつ十じゅう一いつ日にち将しょう軍ぐん秀ひで忠ちゆう諸しよ候こうをを率ひためめてて入い朝あさ一いつ白はく

金きん萬まん兩りゆうとと献けんむむ豊とよ臣しん氏し既すでにに亡なびびとと一いつ以もつてて令れいとと下げ  
一いつ考こう必かならずのの廟めうをを毀くわいせせたりたり然しかれれどもども京きやう原げん東とう山さん方ほう  
廣くわう寺じ即すなはちち大だい佛ぶつのの寺じ院いん及および比ひ高かう基き寺じをを存ぞん在ざいすす基きハ  
北きた廳てい室しつ淺せん野の氏し正せい建けん立りつししてて以もつてて秀ひで吉きちのの冥めい福ふくをを祈いのりり  
一いつ所ところなりなり一いつ小こ祠でらふふハハ今いま不ふ至いたららずず猶なほ秀ひで吉きち夫つま妻つまのの像ざう  
有ありり秀ひで吉きち在ありり世よのの時とき女むすめをを嬖へいしし妻つま不ふ為なるるとと一いつ以もつてて由よし  
皆みな之のとと別べつ宮みや小こ室むろをを獨ひとり北きた廳ていとと同どう居きすす北きた廳てい秀ひで吉きちをを  
依よけけてて天あま下げをを定さだむむるる不ふ禱たう益えきままるる所ところ多たしし常じょう小こ秀ひで



七下  
十

秀忠諸  
候之學  
參朝ス



九

吉と戒めりて曰ふ程はくバ良人葉摩瓦缸の時と  
 忘りてと勿れと秀吉薨つて髪を削り秀吉を視  
 ると猶其自出のどく一親属諸君と一之と輔翼  
 せしむ末ご嘗て冥東と譽せ用うむ北廳および其諸  
 君希後不皆没し秀吉孤立となりてを以て亡ぶ  
 る不至れりと云ふ凡希後の役不豊臣氏の回は  
 冥東不従つて城を攻むるりの甚ご衆うりしも  
 猶福島正則従はざり正則ハ冬の後起る不及び

治長幸村らと謀陰入其封安藝より粟五万石代  
 輪以其姪伊予守正守兵部正鎮とて入城せむ  
 小泉由疑れが中重信家康の命を受け駿河より  
 江戸へ赴き正則と係せしが正則書を以て秀吉と  
 懐て曰ふ郎君冥東の角み伴ひ遂ふ其るを勸りまの  
 自ら七滅を遂ふまをたう程く其國を改め澄君と冥  
 東ふまじ以無るをけれ石らざれハ別老奴東軍の先鋒  
 とて一挙ふ城を拔ん其時ふ至り君悔ると勿れ豊臣氏

の安花此の決せん於くば之と懸陣と希野軍上坂の途ふ  
して其書や覽れども遂ふ正則の從軍や許さむ秀  
於正則の書やばて對へば正則復東角や受け其  
子正徳や師ふ會せしむるも後之正則其信  
編島丹波尾関石見や戒て曰ふ汝軍我兒や輔け  
以て郎君頼ふ應ト我が江戸ふ在や以て念と爲  
る事莫れ郎君事や成さば吾死とも恨むが然  
らざれば則吾何や以て太閤ふ地中見へんやと

丹波命ふ従はんとなむ石見之や争ふて曰ふ吾  
傳の主公ふ於る猶主公の右府ふ於るがごとく  
儕何ぞ主公ふ禍ひの來る事と爲可けんやと遂ふ  
正徳や擁けり東軍ふ會したり是役軍の奉ふ及  
ばむとらんどの島津義弘の幸村と密に謀る所あり  
しと元和五軍ふ至り將軍秀忠在東し正則  
江戸ふ在り秀忠鳥居左京亮忠政や師正則の  
弟ふ就き封と禱ひ之や津野ふ放つの命や傳ふ

正則 嘿然たると久しうて曰希乃軍や一々世ふ  
在り一わバ吾一言申まづきと有ども今何や  
言んと乃ち起り内ふ入り其兩女子を挈へ出で  
流涕使者ふ謂て曰ふ吾足下と死や決せんと思  
召ふ先女兒を教さんと思れども年老たれば今  
又や加ふるも小忍びざるふより當ふ甘心命や受  
くべしと因て死所ふ赴く秀忠又使ややり山陽  
南海の諸侯を率わさせ其封安藝備後を没収さ

せし其老臣ら廣島城に留り守り命をなま  
せ肯ぜど正則の書至る乃ち城を致して去る正則  
冥ぶ京の後より功を負え橋樑多く嘗て東吏伊  
弉圖書助今成を教し大坂の役ふ至り陰に謀  
城中小通下又擅に城郭を増築き家政苛酷に  
殺戮を嗜ふ不民の苦に之を顧りまがせふ放て  
秀忠井伊直孝と配流の策を決まるとの後配所  
を改め信濃に放ち七万石の邑を給せり正則

良上二八八

七下二二

の弟掃部頭正頼和守宇守の城主たり先四軍封と  
 纏うたひる又法正の男肥後守忠族由其封せられ地  
 肥後と奪うかつれ出羽でみ放はなさる後軍加後福島両氏  
 の迷亂めいと尋ね縁ゆかりと給たまへ皆旗はた下くだし属ぞくせしめたり  
 一徳ひとみ大坂おおさかの役起たるよ及び真田幸村さだむね以為淀君  
 治長ちぢやうらの有あらん限りかぎの天下てんかの人望にんぼう秀頼ひで頼よ及ませ  
 ると思おもひもよよぎ志しろ志しろ一旦城圍いっぺんじやうゐと遁のがれ時ときと  
 徳とくんふいと固こり了り冬ふゆの役島津義弘しまづよしひろと侍さむらいり一軍いっぐんあり

望のぞみふ和儀わぎ懸かひしふより再また受うけ弘ひろみ謀まく密ひそに  
 島津しまづの信のぶと大坂おおさかふ忍しのび入いらせ毒どく射やり及び其子大  
 助すけ後ご後ご其次つぎら三百さんひゃく余名なま秀頼ひで頼と守まもり城じやうと遁のがれ出い  
 で義弘よしひろが迎むかえの船ふねふ乗のりり薩さつ州しゆふりる義弘よしひろ若わかく  
 秀頼ひで頼と見み館たねと新築しんききして之これふ徒たへ入れ時ときの至いたる  
 と徳とくつと秀頼ひで頼と稱いふし自し殺ころせしりの内うち本村主計ほんむらじゆ  
 頼宗たのむね明あきふと男おとこ五い松まつと名なのり新あらふ處ところせられしハ  
 元親もとちかの五男ごなん右衛門ゑもん五郎ごらうなりと往むかへ秀吉ひでよし島津氏しまづぢと

征討せし時義弘先づ降る秀吉曰ふ吾初不夜の  
臣を誅し逆類無くしめんを願ふ耳島津氏の  
源右大將の遠裔なりと四百歳の名族と一日小  
す滅すの吾亦恐びざれば其之と者まとい義弘の  
父義久身き大いふ喜び髪を削り傷衣を被束つ  
了降伏す秀吉延見温言之と慰籍し薩隅日の二  
ふの故よりの領地をよよ固て其位願させしり  
おと以て大坂ふ力とせしりしつゝ然るふ是年

八月義弘病死し十一月幸村亦死し十二月十八日  
秀吉薨す是ふ於て事皆重餅となり幕府ふりし由  
其確証や得ざるふより此事の措き又問口は秀  
吉及び幸村基次らの子孫を彼の地ふ在りと  
云ふ秀吉の家大將治長の子なり治長頗る姿容  
美なり秀吉在世時より密に淀君と通し秀吉を  
生んぶ秀吉の子と存す秀吉之を知らざしつゝ  
編者曰ふ先哲太閤や源しつゝ曰ふ秀吉と

明國えんこくの宋世まへのよも在あらざりし之これも假かりまゝ軍いくさと以おもへり  
 せむのぐくんと朱明しゆめいの國くにと獲とらむ者もの覺羅氏あきらしと  
 待まちぎらざるや知らざらんやと其人そのひととあり秦皇漢武しんのうこうていのおん  
 及び佛國ぶつこく那勒翁なれおん第一世せも肖まる雄才大略ゆうさいたいりやく遠とほく  
 其右そのみぎも出いづ八歳やちゅうねんも一ひとつ六十四國くわくと定め則すなはち其  
 餘力よりのちからと以おもへり之これと海外かいがいも運こべしと然しかれども太  
 閻たゝの天下てんかとほる譬たとへの同巷どうきやうの人博奕たかあそびと一ひとつ大  
 勝かちつ獲とらせしむるが如ごとく苟ゆるも勝かちつべ乃すなはち大おほく

之これと揮霍ていかくし其朋類そのともがらと招まねき碎飽くわいほう喧嘩けんか勢いきほひつ快たのしみと  
 一時ひとときも承うけたまる唯ただ然しかり故ゆゑも暴あつふ富とほく人怨ひとをうらむとせむ  
 太閤たごう人奴ひとぬより起おこり土地とち固かたま有ある能あたる故ゆゑも其利そのり  
 也やかるや惜おしまざり人民じんみんも固かた我が膏あぶらへも難あたら  
 ぶ力ちからと用もちゐるや愛あいまざり其禍そのわざはひ遂つひも此こゝも至いたる  
 梁武帝りやうむてい言いへる事こと有り吾われより之これと得える者ものあり  
 之これと失うしなふ復恨ふくみむる所ところ無なしと則すなはち太閤たごうも其れ亦また  
 恨うらむる所ところなかりんこと

繪本難波戰記三編卷之五 大尾

明治十四年八月廿三日 御届  
同十五年四月十五日 出版

編輯人 和 田 定 節

東京府士族  
下谷區坂本町一丁目  
十四番地  
同府平民

書肆 出版人 武田傳右衛門

京橋區彌左工門町  
十三番地

浪華史略

一名難波戰記  
五編近刻  
出版

葛飾為齋畫  
花鳥 山水 漫画早引  
初編二冊  
二編近刻

彰義隊天野八郎遺稿  
上野戰爭記  
半紙本  
全二冊  
鮮齋永曜画

波多野英一先生著  
小學用文填字法全二冊  
霞峯片桐先生書

山々亭有人著  
赤穗 義士 烈婦 銘々傳 全二冊  
孟齋芳虎画

松村春輔編輯  
近世櫻田記聞 半紙本  
全七冊  
月岡芳年画

東京書肆 文永堂 武田傳右衛門

彌左工門町十三番地

010190509376



染崎延房編纂

# 浪華史畧

一魁齋

芳年畫

圖

東京

書肆



文永堂發行

65

60

55

50

